

特集

「つながる」の先に。

Oos

MAGAZINE EPISODE.2

鈴木あい “オトナの童謡”を楽しむ

茗

荷谷駅近くの中央大学茗荷谷キャンパス2階にある大塚地域活動センター。そこ

に広がる約193平方メートルの大塚オーブンスペース(Oos)で繰り広げられるイベントや展示が、何やら最近賑やかしいと人気となっています。

ここ文京区には、地域の人、組織、活動など、価値ある資源がいっぱいあって、それらを紹介して繋ぐ空間としてOosが機能しているのです。

さて、Oosマガジンは、Oosでの活動に関わった参加者によって、執筆・制作している地域のミニコミ誌。エピソード2の本号のテーマは、「つながるの先に」。参加者一人ひとりの地域への思いと暮らしがその先を浮き彫りにしていくことでしょう。

▼まず表紙を飾るのは、シンガーソングライターの鈴木あいさん。窪町小・一中卒と、地元生まれの地元育ち。震災以降100回以上気仙沼を訪れ、音楽を通じた復興活動を継続しています。今年から大人に向けた童謡を発信するオトナの童謡プロジェクトを始動し、その歌声を地域の高齢者施設などに還元していきたいとのこと。

▼Oosでは、地域の企業もその活動に参加しています。絵本で知られるア

Oos MAGAZINE EPISODE.2



リス館さんには、企業が地域活動に参加する意味と意義を座談会形式で語ってもらいました。

▼次にOosがある地域を知ろうということ、で、「私もう終活終えたわよ」と笑う大塚一丁目生まれ育ちの関根由子さんに、この地域周辺のむかし語りと定年後の地域デビューのお話を。

▼Oosでは、mTALKという地域の人によるトークイベントが人気なのですが、9月に登壇いただいたのは、漆に特化したギャラリ「スペースたかもり」を営む高森寛子さん。関根さんのご紹介です。地元とはいえ知る人ぞ知るのギャラリで、漆と輪島に纏わる興味深いトークを、文京区の地域情報をWeb発信している及川敬子さんに報告してもらっています。

▼また、東京ケーブルネットワークの土岐充さんからは、これまた人気コンテンツとなっている「小学生アナウンサー体験教室」の報告を。余談ですが、ここでごんばった小学生が、その後土岐さんの番組に出演したそうです。

▼トリは、今年文京区民になったばかりのきたまりさん。Oosがきっかけで、あれよあれよという間に地域の活動にどんどん参加していくフットワークに感服！つながるの先が見えるような気がします。一読あれ。



オトフェス2025に参加したアーティストたち



Interview

読み聞かせをするアリス館の吉原さん（左）と、島崎さん（右）

地域の よみきかせ

小石川五丁目（茗荷谷駅前）
Alicekan

アリス館

Oosで行っている「絵本の読み聞かせと、おもちゃ作り！」は、主に未就園児の親子の憩いと学びの場になっています。読み聞かせを担当しているのは、地元出版社のアリス館さん。企業の地域活動への取り組みを、同社の田辺社長と、読み聞かせを担当している編集部の湯浅さん、販売企画部の吉原さんに伺いました。

アリス館というと、茗荷谷駅のホームに大きな看板がありますね。

吉原・看板の絵は『でんしゃにのって』の表紙をもとにしたものですが、みなさんにアリス館のことを知ってもらうために、最初に「看板ありますよね」という導入で、いつも『でんしゃにのって』

て』を読むようにしています（笑）。

田辺・アリス館は、1981年に創業した出版社です。ずっと子どもの本にこだわって、赤ちゃん向けの絵本をはじめ、中学生くらいまでの年齢を対象にした本を作っています。出版物の8割が絵本です。文京区には、1993

年に護国寺に越してきて、茗荷谷に移転したのは2016年からです。

どんな本作りをしているのですか。

田辺…子どもたちの豊かな感受性を育てるところにずっと問題意識があつて、そこを意識しながら作る本というのは、おとなにとっても何らかの響きがあるものだと思います。ただ単に絵の入っている本を作っているのではなくて、編集企画で、子どものどういう発達段階で、この本はなぜ必要なのか、どんな意味があるのか、ということ議論しながら進めています。

アリス館という個性を大切にしているのですね。

田辺…はい。本というものは、普通は作家で選ばれるものですが、私たちは、出版社のカラーとして、アリス館の本を選んでいただけるようにしたいと思っています。例えば、ヨシタケシンスケさんとか鈴木木りたけさんのような有名作家さんであっても、それをアリス館が作つたらどうなるのか、なぜその本を作るのか、という問いをいつも大事にしています。読者が初めて



茗荷谷駅の1番ホームにある看板



吉原美優さん
販売企画部



湯浅さやかさん
編集部主任



田辺直正さん
代表取締役

触れる作家さんであっても、「アリス館の本なら手に取ってみよう」と思ってもらえたら嬉しいですね。

湯浅…アリス館の場合は、編集者みんなで議論する、合議制になっていきます。編集会議は読み合わせをして、それを聞いてどう思うか、作り手の視点もあるのですが、読者としてどう感じ

るかという点の意見を出し合っています。あとは、作家さんの書いた文章を作家さんの前で声に出して読むのですが、それは作家さんも驚いたりします(笑)。そんなことは、あまりないみたいですね。絵の作家さんにも読んで聞かせます。絵本は、声に出して読むもののので、音になった時にどう感じるかということを大事にしています。

読み聞かせをはじめたきっかけは？

湯浅…茗荷谷に移ってきたときに、まず最初に感じたのが、「駅前に親子がいっぱい歩いている」っていうことでした。護国寺はサラリーマンの街だったので、「茗荷谷は学校がいっぱいある！」って。ベビーカーを押しているお母さん多いって、ここで読み聞かせ会をしてみたいと思いました。茗荷谷の本社の会議室で2年ほど不定期に行っていたのですが、コロナ禍で中断。その後コロナ禍が収まった頃に、ちょうどOosのお話をいただいたのです。会社ではキャパの心配があるのですが、こんなに広いスペースで、区民のみなさんに告知もしていただけということなのでやってみようと思いました。

Oosでの読み聞かせは、どんなやりがいがありますか。

湯浅…やっぱり、真の読者に会えるということが、一番のやりがいですね。読者と話ができる機会はなかなかないのです。会社って大人ばかりですからね。まわりに子どもがいない状況で、いくら社内でも読み合わせしても、頭の中で考える子ども像だけになってしま



それぞれ思い思いのお薦めの本を手に

います。「これくらいはわかるだろう」とか、自分の中の想像と実際が乖離しているかもしれないね。「あつ、1歳ってこんなちっちゃいんだ」とかって、実際にふれ合ってみないと分かりませんし、「子どもは絵本が好き」と

いうことは理屈では分かっているのですが、「こんなにちっちゃいのに、こんなに聞いてくれるんだ」ということに感動します。実際読んでみると、「こんなに真剣に聞いてくれる子どもたちを前にすると、いいかげんな本は作れ

ない」っていう、編集者としての決意も新たになるのです。

読み聞かせは、赤ちゃんに読んでいるのですが、お母さんが楽しんでると、赤ちゃんも喜ぶのが分かります。それを感じられるのが、またいいですね。

吉原…常連の方もいらしていて、名前が分かるお子さんも増えているのでそれも嬉しいです。参加していただいた方には、いつもアリス館の目録とシールをお渡ししています。お子さんの成長って、本当に早くなって感じます。前までは、ベビーカーで来ていたのにもう歩いている。「引越したけど、Oosの読み聞かせが好きだから来ました」という方もいらして、本当に嬉しいですね。

湯浅さんのウクレレに合わせた歌があるのが本当に楽しいです。

湯浅…相手が赤ちゃんなので、読み聞かせだけだともたないで、歌を歌ったりとか、音楽を入れていきます。こちらも音楽が楽しくなっちゃって、最近音楽多めになっています(笑)。

きむらゆういちさんという『あらしのよるに』(講談社)などを書かれて

いる有名な作家さんのお話で、「言葉に絵が付くと絵本になって、言葉に音が付くと音楽になる」というのを聞いたとき、とても納得しました。本と音楽というのは親しい関係にあって、子どもはその両方が好きだということで、読み聞かせと音楽をセットにしています。童謡とかは、赤ちゃんは歌えませんが、お母さんは歌えるので、お母さんが歌っていると赤ちゃんも嬉しそうになって、けっこうみんなじっと聴いているんです。だから、あまり知られていない歌ではなくて、みんな知っている季節の歌をみんなで歌うと、場の一体感も生まれます。

伴奏があると歌いやすいので、ウクレレをはじめました。とても下手ですが、ないよりマシくらい(笑)。なので、読み聞かせの始まる前にウクレレを練習も兼ねて弾いています。読み聞かせは、そっと始まりたいので、参加者は早く来てもいいし、遅れて来てもいい。でも早く来た人のためにも、場に慣れない赤ちゃんのためにも、音楽を聴いていると穏やかになってもらえます。

この会は、会社の三人でやっているのですが、みんな音楽が好きだから、本当に良かったです(笑)。三人でのりのりでハモったり、わいわい考えるのが楽しい。月ごとにリーダーを決め

ていて、テーマを決めて、本と歌を決めます。私のウクレレの腕で弾けるかどうか、というのが最大のハードルです（笑）。

企業と地域との関わりという観点でお話を伺いたいです。

田辺…実は、文京区に会社があるというだけで、今まで地元には何の関わりもなかったのが実情です。でもよく考えてみると、全国の本屋さんに自

社の商品が並んでいるといつてもどこでというふうな読者の手に届いているかは見えにくいものです。でも実際に子どもたちに出会えて、読み聞かせできる機会には手応えを感じています。というのも、まずは足元の文京区で本を通して読者と思いを共有する

という時間は、出版社としてはとても大事なことです。

文京区にアリス館という出版社があるということを区民のみなさんに知ってもらう、その積み上げこそが、自信をもって全国の読者にアリス館の本を届けられるのだという発想になってきたのです。会社が地域で活動し、溶け込むことは、会社にとって大きな成長になるのです。このO o sの活動を通しての実感です。

湯浅…地域貢献とか、そんなに大袈裟なことはそれほど意識していないのですが、ベビーカーを引いて近所の親子に来て欲しいなという気持ちがあります。実際の子どもやお母さんと会いたいです。お客さんがゼロだと寂しいのですが（笑）、たくさん来て欲しいとかではなくて、一組でも二組でも、ゆったり楽しい時間を過ごして欲しいというのが本音です。赤ちゃんがいると外に出かけるのもなかなか大変なので、気軽に来ていただきたいですね。

今後の方向性を教えて下さい。

吉原…いまの読み聞かせのかたちが好評で、私たちも楽しく行えているので、まずはしっかり続けていきたいです。

田辺…文京区には印刷屋さんとか製本屋さんとか、本に関わる仕事が集積しているの、そういうことをもっと区

湯浅…今は、私を中心ですが、私がいなくても吉原さんのような他の社員でもできるように、会社としてみんなが回せるような体制を育てていきたいです。スタッフそれぞれの個性を生かした読み聞かせをつくっていききたいです。

民の方に知って欲しいです。また、茗荷谷駅前にも以前はありましたが、本屋さんも今は激減しています。出版産業が危機的な状況になっているなかで、本にもっと関心が向くような取り組みを区と一緒に作り上げていきたいです。

文京区は子どもの数も多い地域なので、本の文化をより広げていければいいなと思っています。



文京一中前にあるアリス館の分室にて



時には、元気いっぱい



楽しい歌と演奏も



編集室の様子



はじまりは『でんしゃにのって』



子どもは絵本に興味津々



会の後半は、飛田野美幸さんによる「季節のおもちゃづくり」

今ふたたび

大塚

ふるさとで遊ぶ

大塚二丁目在住

Yoshiko Sekine

関根由子



昭和21年生まれなので来年は80歳になる。東京大空襲で焼け出された両親に連れられ、2、3歳の頃、大塚一丁目に来た。以後70年以上今の場所に暮らしている。自分でも信じられない歳を前に、人生の数々、特に幼いころの思い出に浸る日々も増えた。

拓大校内が遊び場

家の目の前が拓殖大学なので、幼いころはその校内が遊び場だった。池もあり、小山もあったので、子どもたちにとっては冒険も探検もできるいい空間だった。沼のような池には、春になればトコロテンのようなカエルの卵がオタマジャクシになり、さらにカエルに成長、夏の夜にはカエルの合唱がうるさいくらいだった。

また11月3日は毎年拓大の運動会です、その日は近所の人総出で行って見に行

た。パン食い競争あり、仮装行列あり、テレビもまだ普及していない時代、学生たちの奮闘ぶりに拍手を送った。

そういえば、子どもたちに怖がられた守衛さんもいたつ。坊主頭で兵隊服のような詰襟風の上着を着ていて、子どもたちを見ると箒をもって追い出していた。多分戦争帰りの人だったのだろう。

野良犬にも風格あり

林泉寺の境内もいい遊び場だった。まだ戦争直後で手入れもされていないなかつたので、墓石もあちこち倒れ、雑草も生え、走り回る子どもたちにとっても格好の場所だった。

また本堂の床下は野良犬の住処でもあった。私が高校受験で深夜まで勉強していた昭和30年代、夜になると野良犬の集団が近所を駆け回って抗争していた。その中のボスがタローだった。統率力に優れていたらしく、近所でもタローの名は轟いていた。実際に間近で見たことはなかったが、あるとき、昼間に遭遇した。すでに老いていたが、人間を恐れない歩き方、その風格、一目でタローと分かった。人間でいえば、百戦錬磨の親分といったところか。犬にも風格があるのだと、今でもその姿は忘れない。



OosのmTALK VOL.10で司会を務める関根さん(右)。左は、講演者の高森寛子さん。



日本酒大好き！

関根由子

1946年文京区生まれ。大塚一丁目在住。窪町小・一中卒。日本女子大学社会福祉学科卒業。地方新聞社へ家庭欄の記事を配信する家庭通信社の代表を務めた。長年、各地の女性職人たちへの取材を続けるかたわら、日本文化を再確認し、より楽しむための活動を主宰し、講座、展示会などの企画を行ってきた。和くらし・くらぶ代表。著書に『伝統工芸を継ぐ女たち』『伝統工芸を継ぐ男たち』『家庭通信社と戦後五十年史』『生き路びき—自分らしい生き方を探す』『47 都道府県・伝統工芸百科』がある。日本酒は純米酒党。

インターネットが普及して世の中が変わっても、顔と顔、人間同士の直接の付き合いが基本だ。人生の最終トランクにふるさとでいい遊び場に出会え、これからもさまざまな遊び相手に出会える予感に、楽しみが膨らんでいる。

高森さんは「作り手と使い手のつなぎ役」という役目をこのように果たしてきた。「暮らしには、気持ちよく使え生活の中でホッとするものがあることが一番、それには漆器のよさをもっと知って」という高森さんのメッセージはもつと広がっていいと思っている。

と、単なる商品ではなく、この人の作ったものという温かさが感じられ、愛おしく大事に使いたいと思う。これが作り手の顔が見えることなのだ。こうして知り合った職人さんたちが何人もいる。



mTALKレポート

普段の暮らしに 漆の器を

取材

Takako Oikawa

及川敬子



及川敬子

一般社団法人まちのLDK代表理事。1966年、東京都生まれ。文京区在住。新聞記者としてキャリアをスタートし、2008年に保育士資格を取得。2017年に小規模保育園を開園。現在では、保育だけでなく「高齢・子ども世代が共に過ごせるスペース」を展開。Webで地域メディア「JIBUNマガジン」も運営。



一般社団法人まちのLDK
<https://machino-ldk.org/>



JIBUN マガジン
<https://jibunmedia.org/>

高森さんのmTALKに参加

「漆の器は温かいものも、冷たいものも、酢のもの、油ものも大丈夫。普段の食事に普通に使ってほしい」。2025年9月13日、Oosで開かれたmTALKで、茗荷谷にある漆器専門のギャラリー「スペースたかもり」を主宰する高森寛子さんが漆への思いを熱く語った。インタビュアーは文京区在住の伝統工芸ライター関根由子さんだ。

茗荷谷の漆専門ギャラリー

スペースたかもりは、茗荷谷の和菓子店「二幸庵」の3階に、28年前オープンした。一幸庵はかつて桜並木上の春日通り沿いにあり、店主夫妻は、客として通っていた高森さんが工芸品にかかわる編集者で、展示会企画もすると知り、時折足を運んだという。一幸庵移転の際、新築ビルの一部屋をギャラリーにしないか、と声をかけてきたそう。



高森寛子

1936年東京生まれ、文京区在住。エッセイスト、茗荷谷で漆に特化したギャラリー「スペースたかもり」を主宰。年に5、6回の企画展を開催している。婦人雑誌の編集者を経て、日本にあるさまざまな生活道具を紹介し、作り手と使い手をつなぐと、数々の試みを行ってきた。著書に『85歳現役、暮らしの中心は台所』（2022年小学館）等。最新刊は、『輪島と漆』（輪島キリモト代表・桐本泰一氏との共著、亜紀書房）。



スペースたかもり Instagram

もったいない。「おせっかいです。黙っていられなくて」
かつて、ギャラリーや販売店で扱う漆製品は触ってはいけない、触る時は手袋をはめる、という時代があったそうだが、「触ってみて使ってみて良さがわかる。もったいなくて使えない、ではなくて、使わないのもったいないです」。漆は使い込むほどつややかになってくるという。「漆のカトラリー

漆に特化したのは「両親が輪島出身で、毎日のみそ汁の椀、おやつ入れ、弁当箱、ごく普通に漆の器があったから」。ところが結婚して初めて、世の中の家庭では漆は特別なもので、暮らしに採り入れるには敷居が高いと思われるに気づいた。自分ひとりが漆の良さを知って使っているのは

使い手仲間を増やしたい

ちょうど漆の本を出したところだった。文章は一方通行だが、客と対面できるギャラリーなら、作った人たちの気持ちを直接伝えられるのではない。バブル経済がはじけて漆器問屋が立ち行かなくなり、作り手と使い手を直接つなぐ好機でもあった。「欲しいもの」を買いたいと思っていった私は、時代のいいところになりました」



高森さんが愛用している湯呑み



会場には、高森さんの普段使いの漆の器を展示



2024年1月1日早朝、穏やかで美しい輪島の海



思い思いに漆の器を手取る参加者



「輪島塗 Rescue&Reborn プロジェクト」の器



終了後、希望者は「スペースたかもり」に移動

3年前、「85歳現役、暮らしの中心は台所」という本を出した。「年齢はずっと隠してきたんですけどね、やむを得ず公表した。そうしたら気が楽になったわ」と話す高森さん。若々しい米寿だ。「長年茗荷谷でお店を開いていたけど、今回のmTALKで地元を目標に大切さに気づいた。地域の高齢者に漆の器でご飯やお味噌汁を振る舞う食事を開いてみたいです」

地元を目標に

「やさしくて温かくて食べ物がおいしくて、美しい輪島。地震、洪水で心が折れた方たちに、仕事を生むことができた。どうか、忘れないで、買って使うことで支えていただけたら」

輪島への想い

もおすす。口当たりが穏やかで優しいんですよ」

輪島は2024年1月1日の能登半島地震と、その後9月の豪雨で大きな被害を受けた。スペースたかもりでは、被災した家や蔵から救出された漆器を洗浄し修復し塗り直し、現代の器として生まれ変わらせる「輪島塗 Rescue&Reborn プロジェクト」を応援している。「やさしくて温かくて食べ物がおいしくて、美しい輪島。地震、洪水で心が折れた方たちに、仕事を生むことができた。どうか、忘れないで、買って使うことで支えていただけたら」



小学生アナウンサー体験教室
in 文京区 (あらぶんちよ!ぶらす)



ドキドキだけど、楽しい! アナウンサー体験



小学生アナウンサー体験教室

津軽弁と標準語の二刀流。郷土の作家・太宰治の「走れメロス」など音読が大好きだった青森の少年が、アナウンサーを志して高校生の時に声と耳を磨き、夢叶って放送人生を歩んできました。その原点である高校の放送部のメ

文京区の子どもたちに 放送文化を

東京ケーブルネットワーク(株)

Mitsuru Tokei

土岐充

ソッドで多くの中高生を指導した経験
を、文京区で活かしています。

この教室では、大塚地域活動センターの一角が放送室になります。発声・発音の基礎練習から、マイクとカメラに向かって校内放送アナウンスをする、超濃密な1時間半。子どもたちは一生懸命! 一人一人の特性を見極め



土岐充

1966年、青森県生まれ。元 NHK アナウンサー。NHK 退職後は青森朝日放送を経て西会津町ケーブルテレビでコミュニティチャンネルに従事。2019年に上京し、現在東京ケーブルネットワークで番組ディレクターやMCなどでマルチに活躍している。

てアドバイスする私も真剣勝負! 子どもたちは、自分の声で表現する喜びとコミュニケーションの楽しさを存分に体験しています。

教室の後子どもたちは「誰がいちばん上手だった?」と私に訊ねます。お互いの発表を聴いて磨き合うのも上達のコツ。大塚地域活動センターの快適な空間を会場に、アナウンスコンテストを開催して放送文化を育む活動も面白そうです。

人前で堂々と発表するチカラは、いつの時代もどんな時も必ず役に立ちます。この教室が子どもたちの成功体験になり、将来の夢へ、さらに豊かな人生に繋がれば何よりです。

文京区キタ!

文京区在住

Kiamari

きたまり



きたまり

2001年愛知県生まれ。大学時代を大阪府茨木市で過ごし、地域活動や第一次産業（農業・林業・漁業・狩猟の手伝い）に取り組む。現在も地域との関わりに関心を持つ。趣味はお笑い鑑賞で、賞レースは審査員の点数をExcelにまとめながら観るのが定番。

優しすぎるまち文京区

地域に溶け込むって、もって時間がかかると思っていました。

でも現実には、引越して1週間後にはもう「クッキーと桜めぐり」の裏方。段ボールも片付いてないのに、気づけばイベント参加者のガラボン抽選を見守り景品を引き渡すスタッフをしていました。どうやら茗荷谷は、新参者に優しすぎるまち々みたいですね。

大学時代大阪で地域活動をしていた私は、「東京でも何か関われる場所あるかな」と拠点を探すつもりでいました。ところが、まさか自分が暮らす茗荷谷というまちが、こんなに人が行き交い、イベントが次々と生まれる場

所だなんて思ってもみなかったんです。

私は4月から新社会人になるために上京してきました。住み始めたシェアハウスで出会った住民がOosの皆さんとつながりを持っていて、そこから縁をいただきました。そして数日後には「クッキーと桜めぐり」のお手伝い。地域の方に混ざって、気づけば私もイベントの裏側に立っている。茗荷谷の皆さんの懐の深さに触れ、「あ、ここは新参者でもすぐに仲間になってくれるまちなんだ」と心から思いました。その後も、Oosのイベントに参加者として、ときにはお手伝いとして関わりました。輪の中に入るたびに「東京でも地域ってこんなに開かれてるんだ!」という驚きがありました。

まちの一体感を感じた体験

とりわけ忘れられないのは、第一中学校や傳通院での盆踊りです。まずはOosでの練習会に参加して、人生で初めて盆踊りを習得。本番では周りを見よう見まねで踊りました。輪を囲むのはまだ顔も名前も知らない人ばかり。でも、太鼓に合わせて一緒に踊ると、不思議と仲間になれた感覚がありました。あのとき感じたのは、言葉なんていらない「非言語コミュニケーション」の団結力。みんなで作り上げるお祭りのパワーに、ただただ圧倒されました。

盆踊りで感じた「まちの一体感」の余韻が冷めないうちに、次に関わったのが「MITAMIO!!」という子どもたちがつくるローカルマガジンの企画でした。

「子どものころから自分のまちを好きになるきっかけをつくりたい」——そう思って動くプロのクリエイターさんたちの熱意に、心から感動しました。写真の撮り方やイラストの描き方を学ぶ講座にも参加して、まるで自分も地域のクリエイター見習い。子どもたちと一緒に、学びながらまちを発信するその時間がとても贅沢で、あたたかいものでした。

同世代のつながりをつくりたい

これからは、地域の大学生や若手社会人ともつながりを広げたいと思っています。

茗荷谷には、とにかくイベントが多い。でも同世代と出会う機会はまだまだなくて、そこが少し物足りないところ。だから私は、このまちで「地域活動っておもしろいよ!」と共有できる友だちをつくりたい。同世代が気軽に飛び込める雰囲気を広げていきたい。そのために、一緒に参加して楽しむ方法を模索中です。学生時代から地域活動経験を持つ自分だからこそできる関わり方があるんじゃないかとワクワクしています。

まちの一員として活動させていたただく中で、これからもきっと予想外のドラマに巻き込まれていくんだろうな、と期待しています。



盆踊り練習会に参加



茗荷谷界隈サイコロ

*毎年桜の時期に開催される、茗荷谷界隈プロジェクト主催のスイーツなどの素敵なお店を巡るスタンプラリー。Oosで景品交換を行っている。



ご近所 茗荷谷界隈 Facebook



7/20 (日)

● オトフェス（音づくりのまち文京区）2025 in Oos

▶ 音のアーティスト 7 人

いろんな音づくり体験が楽しめる一日でした。

「文京区内外で音の創作活動をしているアーティストたちが、一堂に会してワークショップを開催。作った音を、みんなで楽しみました」



8/8 (金)

● 「Oos ワークショップ 1」 金融教育の動画制作ワークショップ in 文京区

▶ 一般社団法人日本金融教育支援機構

中高生が動画で「お金の大切さ」を伝えるコツを学びました。

「探究・表現・創造を大切にしたい学びを通して、自分の言葉で“金融”を語る力を育む、実践的なプログラムでした」



8/23 (土)

● 「Oos ワークショップ 2」語り合えるスゴロクで遊ぼう！ー人生のパズルが、つながる。

▶ 支 めぐみ（ナニモノソウル開発者／自己認識コーチ／キャリアコンサルタント）

スゴロクを通して、自分の経験・想い・夢が物語になりました。

「スゴロクを進めるほどに仲が深まるコミュニケーションゲームを通して、自分自身の理解とプレイヤー同士の絆が深まりました」



8/30 (土)

● 【東京ケーブルネットワーク】小学生アナウンサー体験教室

▶ 土岐 充（東京ケーブルネットワーク番組ディレクター、元 NHK アナウンサー）

体験した小学生が、実際の番組のナレーションも体験しました。

「現役のアナウンサーによる、アナウンスの基本練習、アナウンサー体験。人前で話す力や表現力を高めることにもつながります」



9/6 (土)

● 「Oos ワークショップ 3」地域に開く、自分のトビラー対話から見つける、あなたの「これから」と「できること」

▶ 芦沢 壮一（スキルノート主宰）

地域の中での役割や自分の強みを、対話を通して見つけていく時間でした。

「何か始めたいけれど、何ができるかわからないという方におすすめでした」



9/13 (土)

● 「mTALK（茗荷谷界隈トーク）VOL.10」 普段の暮らしに漆の器を

▶ 高森 寛子（スペースたかもり）

茗荷谷で漆のギャラリー 28 年の物語を語っていただきました。

「漆の使い手仲間を増やしたいという一心で、その美しさ、心地よさを伝えてきた 28 年間。漆と輪島のお話、その思いを聞きました」



9/26 (金)

● 「Oos ライブ」“オトナの童謡”を楽しむ

▶ 鈴木 あい（シンガーソングライター、童謡アーティスト）

このライブをきっかけに、地域のイベントで披露する場が生まれました。

「懐かしくも新しい、オトナのための童謡時間。記憶に残る美しい曲を参加者と一緒に歌いました」

Oosイベント一覧（令和7年度前期）



4/4（金）～6（日）

● 第6回クッキーと桜めぐり

景品交換所としてオープンスペースで交換をしながら Oos の活動紹介です。

「お気に入りのお店、初めてのお店、茗荷谷界限にはきっとまだあなたの知らない素敵なお店があります。界限の桜（播磨坂や植物園ばかりでなく）を眺めながらそれぞれのペースで楽しみました」



4/10（木）、6/12（木）、8/7（木）

● 【アリス館連携企画】絵本の読み聞かせとおもちゃ作り

▶ アリス館

未就園児の子を持つ親子の顔の見えるつながりにもなっています。

「ほっこりするお話をたくさん用意しています。よみかき後は、簡単なおもちゃを手作ります。0歳のお子さんから参加しています」



4/17（木）

● 「Oos 体験会 2」心と姿勢を整えるヒールウォーク 2

▶ 酒井 純子（ウオーキング・コンテストトレーナー）

歩き方だけでなく自信も引き出すヒールウォーキングで、元気をもらいました。

「歩く技術と共に大切な事はマインド作りです。美しく歩くことで、女性が明るく楽しくなることにつながる教室でした」



5/11（日）

● 「Oos 体験会 3」音楽×アート～音楽から物語を描こう～

▶ つかだ ゆうこ（音楽から子どもの自信を育む専門家）

描いた絵を、みんなの前で自ら発表する姿を見て、親御さんも驚いていました。

「子どもたちの感性を音楽・絵・言葉で引き出します。音楽を聴いて曲のイメージを言葉や動きで共有し、思いのままに絵を描きました」



6/14（土）

● 【印刷博物館・b-lab 連携企画】マイノートをつくらう～中綴じ製本体験

▶ 印刷博物館

実際に使える自分だけのノートを作り、製本の仕組みを学びました。

「製本について気軽に学べる 40 分です。印刷博物館で行っているワークショップを Oos に出張して行うプログラムです」



7/3（木）

● 江戸の切り紙「紋切り」で知る文様文化

▶ 下中 菜穂（造形作家、昭和のくらし博物館副館長）

手を動かしながら暮らしの中で育ってきた日本の「かたち」の文化を味わいました。

「紙を折りたたんで型紙の通りに切って開くと紋切りができます。できた和紙の紋切りを貼って素敵なうちわが出来上がりました」



7/5（土）

● はじめての盆踊り練習会 2025

初めての方向けに盆踊りの練習会を開催しました。

「今まで踊ったことが無い方、いつも輪の外で眺めていることが多い方にお越しいただきたい練習会。踊る前に知っておいた方が良いこと、東京音頭、炭坑節など、どこでも掛かりそうな優しい曲を中心に練習しました」



Oos

MAGAZINE EPISODE.2

2025 年 11 月 30 日発行

発行：大塚地域活動センター オープンスペース企画事務局
(運営：図書館流通センター／Myogadani Lab.)

E-mail：otsukaop@gmail.com

制作：Myogadani Lab.

Oos住所：文京区大塚 1-4-1 中央大学 茗荷谷キャンパス 2 階

